15th 新響

新交響楽協会 新交響楽団
第15回定期演奏会



'67.12.14

THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA

15th Subscription Concert

指　揮　芥川也寸志

Conductor　YASUSI AKUTAGAWA

楽新協交会響

新交響楽団

第15回定期演奏会

日比谷公会堂　1967年12月14日(木)　7時

Ⅰ　合奏協奏曲ハ長調作品6の10……アルカンジェロ・コレルリ

Concerto Grosso X Op. 6 Nr. 10…… Arcangelo Corelli

Preludio—Allemande—Corrente—Minuetto

Ⅱ　小組曲……クロード・ドビュッシー

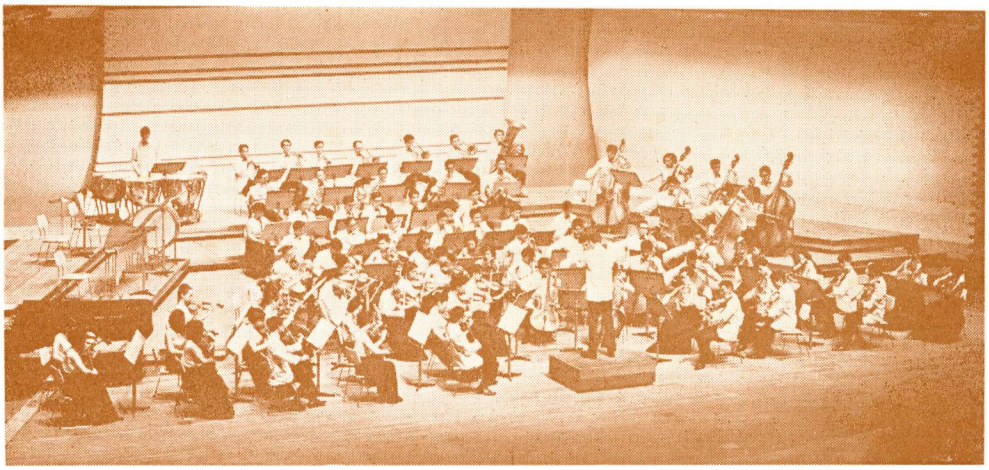
Petite suite……Claude Debussy

1. 小舟にて
   En Bateau
2. 行　列
   Cortège
3. メヌエット
   Menuet
4. バレー
   Ballet

Ⅲ　交響曲第2番　ニ長調……ヨハネス・ブラームス

Symphony No. 2 in D-major ……Johannes Brahms

1. アレグロ・ノン・トロッポ
   Allegro non troppo
2. アダージオ・ノン・トロッポ
   Adagio non troppo
3. アレグレット・グラーツィオーゾ
   Allegretto grazioso
4. アレグロ・コン・スピリート
   Allegro con spirito



あ　い　さ　つ

人間の知恵が，１人で何人分もの演奏ができるような，便利で近代的な楽器を作りだしても，長い歴史をもつ，オーケストラは多くの人々に親しまれております。

この数十名からなるオーケストラの魅力はつきることなく，私たちの心をとらえて離しません。

新響は発足以来，十余年にわたり，この魅力にとりつかれた楽員たちの努力によって少しずつ成長してまいりました。今まで私たちはオーケストラとしての体制をととのえることを目標に，力を団の内部に向けてまいりましたが，これからは外に向けて私たちのエネルギーを出していく時だと思っております。

音楽を愛する人々の沢山いるこの社会へ，気軽に飛び込めるアマチュアということを武器にして新響のこれからの活動を生かしていきたいと考えます。

経済的には基盤の弱いアマチュア団体ですので，私たちの今後には，その土台をゆさぶるようなことがおこるかもしれません。しかし，過去の経験をいかして，あらゆる苦難に打ちかっていくエネルギーが新響にはあると確信しております。

皆さんに親しまれつつある新響の音が，もっともっと沢山の人々に聞えるよう頑張るつもりです。どうか今後ともより一層の御支援の程をお願い申し上げます。

1967年　12月14日　新　交　響　楽　団

曲目解説

合奏協奏曲　ハ長調　作品６の10
アルカンジェロ・コレルリ（1653〜1713）

もくもくした巻毛の大きなかつらは，この時代すなわち17世紀後半から18世紀にかけての名のある人たちの共通の特徴であったらしく，作曲家たちも，コレルリより30年ほど後輩の有名なバッハの肖像に代表されるような，もくもくの頭をしていました。けれども，その頭からはすべて同じようなもくもくした音楽が生まれたわけでは決してなく，特に室内楽や器楽曲を書いた人たちと，オペラを中心に作品を残している人たちとに大別され，コレルリはイタリアにあって前者のグループの代表者の一人とされています。そして，いわゆる合奏協奏曲という形式を確立しただけでなく，歴史に残る数々のバイオリンの名手の草分けとしても有名です。

作曲者の死後間もなく弟子たちの手によって出版された，作品６の合奏協奏曲集には12曲がおさめられており，今夜演奏される曲はその10番目にあたるものです。２つのバイオリンと１つのチェロからなる独奏３部と，弦楽４部の合奏部のために書かれたこの曲はすべてハ長調で，６つの部分に分けられます。すなわちまずゆっくりな「前奏曲」に始まり，続いて快活な４拍子の「アルマンド」，それに短かい橋わたしのアダジオがあり，すぐに速い３拍子の「コレンテ」にはいります。ここはソロのパートが活躍するところです。次にソロとトゥッティの対話からなるアレグロが続き，活発な「メヌエット」で結ばれています。

演奏しているメンバーは，この夏に，新響の弦楽器奏者の精鋭たちによって誕生した室内楽団で，今夜が処女演奏。これからは独立した演奏会も持とうと張り切っています。

小組曲
クロード・ドビュッシー（1862〜1918）
アンリ・ビュッセル編曲

一台のピアノを２人で弾く連弾は，それが最小の合奏単位であり，アンサンブルの感覚を養う上にきわめて有効であるといったしかつめらしい理屈はぬきにして，楽しいものです。ピアノの前に長いいすをおいてならんで腰をかけ，演奏の都合上低音部奏者の左手と高音部奏者の右手はしばしば交さします。有名なフランスのピアニスト，ロベール・カサドジュとギャビイ夫人はこうしたアンサンブルが音楽以上に発展した例ですが，この２人の弾く小組曲は，いくつかあるミスタッチなど吹きとばしてしまうようなすばらしい呼吸を，レコードを通して耳から伝えてくれます。

この小組曲がピアノ連弾用として書かれたのは，ドビュッシーが４捨５入してやっと30才になろうという若い時ですから，いわゆる印象派的と言われる味が強くありませんが，やはり感覚をふわりと包んで仕上げた独特の音は，和声学上のむずかしい理論をぬきにして，どなたにも愛される要素をもっているように思います。

今夜演奏されるのは，この連弾用の曲を原曲完成の20年後にドビュッシーより10年後輩の作曲家ビュッセルが管弦楽用に編曲したものです。

曲は池に浮ぶボートを絵にしたような，ハープの伴奏の上をフルートの独奏がすべる「小舟にて」，うきうきした祭りの行列の光景を思わせる「行列」，古い舞踏会の情景を描写した，バイオリン独奏用にも編曲されている「メヌエット」，それに華やかな「バレエ」の４つの部分からなっています。

交響曲　第２番　ニ長調　作品73
ヨハネス・ブラームス（1833〜1897）

音楽評論家の太田黒元雄氏は，その昭和７年の著者「西洋音楽物語」に，ブラームスの作品の特徴を次のように概説しています。

——ブラアムスは，器楽曲と声楽曲の両方に多くの傑作を出しましたが，概して云ふと，器楽曲の方は古典的で，声楽曲，特に独唱用の歌謡の方は浪漫的です。そしてブラアムスの場合はこの２つの理想がよく釣合っていたのです。ブラアムスは時代の潮流をよそにして，標題楽風の曲を一度も試みずに，純粋な古典的な交響曲や室内楽ばかりを作り，また，「歌劇を書くことは結婚することと同様に私にはむつかしい」と云ったくらいで，歌劇には一度も手を付けませんでした。この点から，ブラアムスな時世に逆行していたともいへますが，その知的な思索的な作品は，浪漫派の作曲家たちによって，力弱く，形式的にされて来ていた古典的な形式に，充実した内容を盛ることに成功し

たのです。

またレコード蒐集家として有名なあらえびす氏は，その昭和16年の著書「楽聖物語」の中で，ブラームスの交響曲について次のように述べています。

――40歳になったブラームスはその音楽生活の最高目標とも言ふ可き最初のシンフォニーを発表した。その「第1」は鬱勃たる情熱を蔵し，休火山に例へられ，雄渾壮麗なものであったが，直ちに世に認められるるに至らず，名指揮者ハンス・フォン・ビューローが，ワグナーとの十年の交りを絶ってブラームスの熱心な紹介者となり，自ら指揮棒を執って反対者の大群を閉塞させてしまった。続いて田園的な美しさをもった「第2シンフォニー」を発表し，ベートーヴェンの「第6シンフォニー」と共に，維納の平和な郊外描写の音画として，後の人に愛されるようになった。

ここで第1交響曲は完成までに実に20余年を要したのに比べて，この第2交響曲は，第1番完成の翌年一気呵成に書かれており，このために第2交響曲が喜ばしく，楽しく，また構成も単純明快であることをつけ加えておきます。

最後に筆者の手許にあるスコアの冒頭の，きわめて単純明快な著者不明の解説を引用して，のりとハサミの解説をしめくくろうと思います。

――1887年の夏（44才），オーストリアの美しい僻村ウェルタァ湖畔のペルチャッハで書かれた。「第1交響曲」完成の翌年である。初演は1877年12月30日にウィーンにおいてハンス・リヒタアの指揮で行われ，第2楽章がアンコールされたほど大成功であった。翌年1878年の秋には「ハムブルグ・フィルハーモニイ協会」の50周年祝典において，ブラームス自身が指揮して演奏した。楽譜は1878年，ジムロックによって出版された。　　（仙名　保）

連　載「戦後日本オーケストラ小史」　Ⅲ

馬　場　　健

■転換期を迎えたオーケストラ界

昭和26年２月，《日響》の常任指揮者，尾高尚忠の死は，転換期を迎えるべき時期に来ていた日本のオーケストラ界における痛ましい象徴的な事件だったといえるかもしれない。そして，まるでそれがきっかけでもあるかのように，この昭和26年には，オーケストラの整備と体質改善への方向を示すいくつかの出来事が起った。

まず当の《日本交響楽団》は，５月に，５年ぶりにかつての常任指揮者で，育ての親ともいうべきローゼンストックを迎えた。５月27，28，29日の第326回定期公演で，ローゼンストックは，ブラームスの第１交響曲，チャイコフスキーの第１ピアノ協奏曲（独奏＝井上園子）ファリアの《三角帽子》から３曲を指揮した。その演奏は，尾高の死の前後数カ月の沈滞を吹き飛ばすかのような白熱の力演だった。ローゼンストックは，その後，６月定期公演と臨時公演を指揮して，アメリカに帰った。彼の再登場は，《日響》にとって，いわばカンフル剤の役割を果したかのようにみえる。

さらに，それまでも実質的には《日本放送協会》の傘下にあった《日響》は，この年の８月１日，財団法人《ＮＨＫ交響楽団》と改称して，名実ともにＮＨＫと一体となった。《日響》が，正式に《Ｎ響》として聴衆の前に登場したのは，９月の定期公演からであった。しかもこの９月定期から，ウィーンのトン・キュンストラー・オーケストラの若い指揮者クルト・ウェスを迎えて常任指揮者の地位にすえた。この時から，《Ｎ響》は，昭和37年３月まで，ウェス，ニクラウス・エッシュバッハー，ウィルヘルム・ロイブナー，ウイルヘルム・シュヒターという４代に及ぶ外国人常任指揮者の時代が続くのである。ウェスの初の舞台は，９月28，29日の定期公演からで，新進ピアニスト，園田高弘を独奏者に迎えて，Ｒ・シュトラウスの《ドン・ファン》，ベートーヴェンの第５ピアノ協奏曲《皇帝》，ブラームスの第４交響曲を指揮し，翌10月定期にはブラームスの《ドイツ・レクイエム》を振るという張り切りぶりを示した。また翌昭和27年１月12日の《ウィーン音楽の夕べ》では，Ｊ・シュトラウスのワルツその他を演奏して，好評を博した。彼は昭和29年の７月まで在任した。

一方，前号に述べたように，昭和22年の10月から，近衛秀麿と上田仁を常任指揮者として，２本建ての定期公演を行なっていた《東宝交響楽団》は，やはり昭和26年東宝株式会社から独立して，名称も《東京交響楽団》と改め，それを機会に，翌昭和27年の春季定期公演から近衛が辞任した。この時期の上田仁と《東響》の活動は，特筆すべきものであった。もともと，近衛のオーソドックスなプログラムに対して，近代，現代の音楽，とくに現代曲の初演に力を注いできた上田は，その後も現代音楽を精力的に紹介した。この〈上田＝東響〉のコンビで初演された作品には，オネゲルの第３，第５交響曲，ショスタコーヴィチの第７以後の交響曲，ストラヴィンスキーの３楽章の交響曲，バルトークの第３ピアノ協奏曲や管弦楽のための協奏曲，プロコフィエフの第５，第６第７交響曲や，第１ヴァイオリン協奏曲などのほか，石井歓の《シンフォニカ・アイヌ》，伊福部昭のヴァイオリン協奏曲，武満徹の《弦楽のためのレクイエム》，早坂文雄の《ユーカラ》，林光の交響曲ト調，別宮貞雄の《２つの祈り》，松平頼則の《フィギュール・ソノール》など多数の日本の作品がある。この現代音楽紹介の功によって，昭和27年《毎日音楽賞》，昭和29年文部大臣賞を受けた。

また昭和26年春，《東響》を辞した近衛秀麿は，新しく《エオリアン・クラブ》を結成，間もなく《近衛管弦楽団》と改めて，翌昭和27年秋から，定期公演を開始したし，昭和21年以来活動を続けていた《東京フィルハーモニー交響楽団》も，昭和27年には財団法人となった。

さらに，前号にも記した大阪の《関西交響楽団》は，昭和25年，関西財界200余社からの寄付をもとに《関西交響楽協会》を設立して，運営の基盤を作った。

このように，当時活動を続けていたオーケストラは，昭和25年から27年にかけて，何らかの形で，改革を行なって，新しい時代を迎えようとしていたのである。

昭和26年は，また，外国人演奏家の来日が，はなばなしくなった最初の年でもあった。第２次大戦後，初の文化使節として，パリ音楽院のラザール・レヴィ教授が来日したのは，昭和25年の秋で，数回に及ぶリサイタルの

ほか，前号でも触れた10月26，27日の《日響》定期に出演して，シューマンのピアノ協奏曲を弾いた。以後，多くの指揮者や独奏家たちが来日して，オーケストラと協演するようになった。翌昭和26年には，ヴァイオリンのユーディ・メニューイン，昭和27年にはピアノのアルフレッド・コルトー，ソプラノのヘレン・トラウベル，昭和28年にはピアノのワルター・ギーゼキング，ヴァイオリンのヨーゼフ・シゲティ，アイザック・スターン，レイモン・ガロア＝モンブラン，昭和29年には，ピアノのウィルヘルム・バックハウス，ウィルヘルム・ケンプ，チェロのピェール・フルニエ，昭和30年には，ヴァイオリンのダヴィッド・オイストラフなど，大物が続々と来日しては，それぞれオーケストラの定期公演や特別演奏会に出演している。昭和28年には，フランスの指揮者ジャン・マルティノンが，《N響》を指揮したのをはじめ，昭和29年には，ヘルベルト・フォン・カラヤン(N響)，マルコム・サージェント(N響，京響，関響)が客演指揮者として来日している。マルティノンは，28年10月と11月の《N響》定期を指揮し，とくに，11月の定期のストラヴィンスキーの3大バレエ《ペトルーシュカ》，《火の鳥》，《春の祭典》は，センセーションを捲き起した。また，当時すでにヨーロッパ楽壇に不動の地位を築きつつあったカラヤンは，29年4月と5月の《N響》定期のほか，数回の特別演奏会で，ベートーヴェンの第5，第6，第9交響曲，ブラームスの第1交響曲，ムソルグスキー～ラヴェルの《展覧会の絵》，松平頼則の《主題と変奏》などを指揮して，圧倒的な感銘を与えた。

このような外国人指揮者や独奏家たちのはなばなしい活躍もさることながら，昭和27年，《N響》が，ウィーンから，ヴァイオリンのパウル・クリング，クラリネットのロルフ・アイヒラー，オーボエのユルグ・シェフトライン，ハープのヨゼフ・モルナールを招いて，陣容の強化と整備に当っている点は注目に価する。現在でこそどのオーケストラも，外国人奏者を招いて陣容強化をはかり，時には，外国のオーケストラとの楽員の交流さえ行なわれるようになっているが，当時においては，《N響》のこの4人が，日本のオーケストラに送った新風は強調しておく必要があろう。この4人は，それぞれ独奏者としてもオーケストラの舞台に立った。中でも，モルナールは，ウィーン少年合唱団出身という経歴を生かして，バリトン歌手としても，昭和28年2月定期のバッハの《マタイ受難曲》に，イエス役として登場し，聴衆を驚かせた。このモルナールは，現在も日本にあって，我国のハープ界に貢献していることは周知の事実である。

このようにみてくると，昭和26年から30年にかけて，各オーケストラは，陣容の整備を行なうとともに，外人指揮者や独奏家たちを数多く迎えて，ようやく本格的な活動に入っていることがわかるのである。

またこの時期の昭和26年9月，商業放送の開始，昭和28年2月のNHKテレビ放送の開始，同年8月の商業テレビの発足といった新しいマスコミュニケーションの発展は，日本のオーケストラにも，大きな影響を及ぼすことになるが，その具体的な現われは次の時期になって表面化するので，次号にゆずることにしたい。

（音楽評論家）

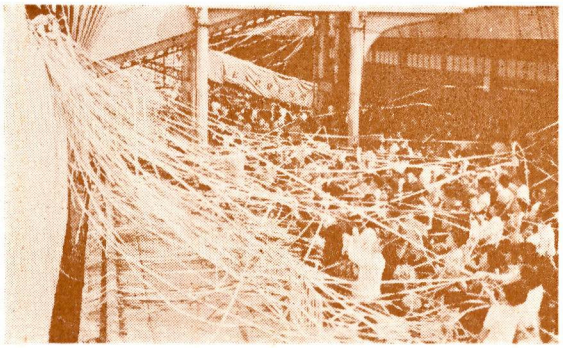
訂正とお詫び

前回の《戦後日本オーケストラ小史》Ⅱの文中，一部誤りがありましたので，次のように訂正させていただきます。なお，読者の皆様，及び馬場健先生にご迷惑をおかけしたことを深くお詫びいたします。

（前回プログラム9ページ右側1，2行目）

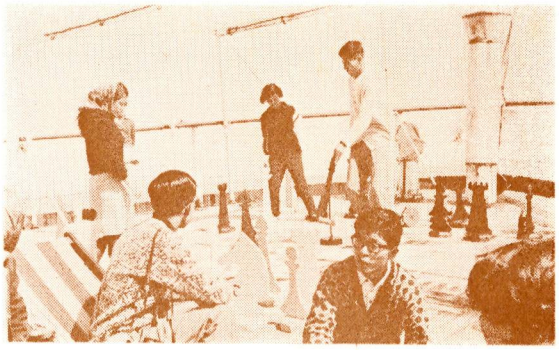
誤）このように，昭和20年8月の終戦から，僅か2年ほど公共機関の援助を受けていないのである。

正）このように，昭和20年8月の終戦から，僅か2年ほどの間に，オーケストラの復興の動きは活発であった。しかし，NHKを経済的後だてとする《日響》を除いては，どのオーケストラもほとんど公共機関の援助を受けていないのである。



9月22日午前11時，横浜港出航

2日と5時間の船旅。甲板のマンモス・チェスに打ち興じる



訪ソ公演の成果と意義

井　上　卓　也（オーボエ）

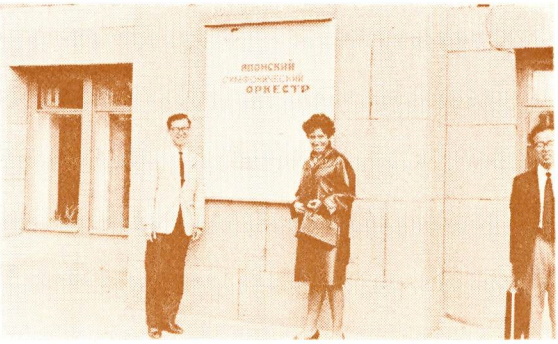
9月22日は新響の団員にとって忘れ難い日となりました。この出発の日，夏のなごりを思わせる暖い日ざしが横浜の大桟橋をうずめつくした見送りの人達と船上の旅人達にふりそそぎ，家族や友人達との別れにもちょっと上気したはずんだ気分があふれていました。ソヴィエト公演――このすばらしいくわだてのために婚期を延ばしたという女性団員，勤務先や学校からの許可がなかなかもらえずに苦労した団員達，ブランクをうめる為に必死に仕事をし，それにも増して激しい練習に耐えぬいた団員達，夢にしかすぎなかった海外公演を実現に導き，準備に奔走した芥川団長と事務局員達。一人一人，思いはさまざまに別れのテープの波の中でかみしめていたことでしょう。新響の訪ソは日ソ青年間の文化，スポーツ，芸術などあらゆる分野での交流を目的とする日ソ青年友情委員会と全ソ青年団体委員会（コムソモール）との文化交流協定により，これ迄の実績を認められて実現しました。

2日間のハバロフスク号の船旅で船酔いのために死ぬ程苦しんだ人も，ナホトカ港に上陸し夜行列車のコンパートメントにおさまってからは，まさに快適な旅行となりました。翌朝目がさめると見えるかぎり一面の白樺林が続き，紅葉の美しさと広大さは「やっとソヴィエトへ来た」との実感そのままに全員の目をみはらせたにちがいありません。白樺林のつきるところが東の都ハバロフスクでした。旅行は終始好天に恵まれ，初の公演地ハバロフスクや次のイルクーツクではあがり気味の演奏にもかかわらず反響は大きく，ホールをうずめつくした聴衆の暖い声援に送られてホテルに帰る私達にはほほを切る夜風もさほど気にならず，それでこそこの国ご自慢のコニャックの味もまた格別という具合でした。イルクーツクから広い大陸をジェット旅客機で一飛びすればモスクワに到着。5時間の時差にとまどったのもこの時でした。モスクワでの4日間の滞在とレニングラードへの訪問は



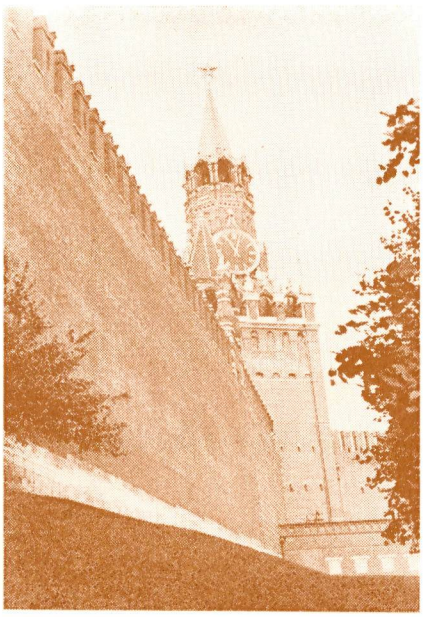
バイカル湖へ向う途中。果てしなく広がる広野原をバスが走る

街角で見かけた新響演奏会のポスター



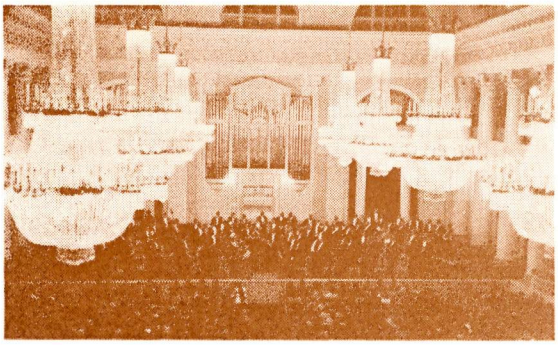
団員にとってもコムソモールの人々にとっても最大の興味と関心を呼び，既に演奏の回数を重ねた新響はベストコンディションで公演にのぞみました。カバレフスキーの組曲「道化師」，グリンカの「ルスランとリュドミラ」，チャイコフスキーの交響曲第5番など本場のロシアでは恥ずかしい演奏も温く受入れられ，芥川先生の弦楽の為のトリプティークや伊福部昭の交響譚詩は好意と理解に満ちた拍手で歓迎されました。新響の主催によるホテルでのレセプションは全て女性群の手による日本料理と着物のあで姿で演出され，30人ものふりそでデモンストレーションはモスクワでも初めての一大ニュースだった様です。この地でロシアの古い歴史と新らしい都市美はみごとに調和し，優れた都市構成を保っていると同時に，この国の将来をになう若者達は未来の繁栄を信じて働く意欲家であり，何事にも無気力であってはならない事を見せてくれました。この友情にあふれた交流が人々の隣人愛と実行力によるものでないとしたら，はたして何でしょうか。新響はこの旅行のために少しでも援助を惜しまなかった全ての人々に心から感謝しなければなりません。人々の心に接して今日の安らぎと明日への希望の源となる音楽を作る為に，手をつないで努力しようではありませんか。

（新交響楽団副委員長・訪ソ代表団副団長）



クレムリンを囲む城壁とスパスカヤ塔

レニングラード・フィルのシーズン最初のコンサートを聴けたのは貴重な収穫だった



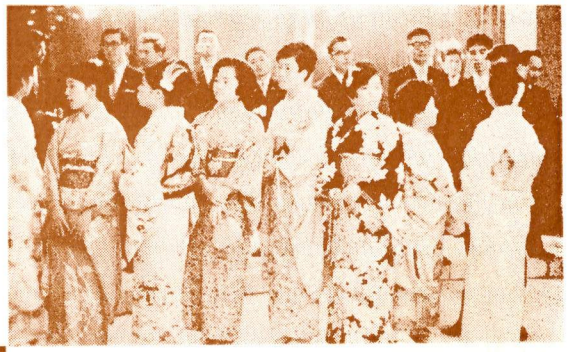
「ロ　シ　ア　風」

河　野　土　洋

妙な事に気がついた。今度のソヴィエト演奏旅行の最初の舞台，ハバロフスクでのこと。いつもの東京での演奏会で，始まる時に抱く緊張感とちょっと違う……むしろ少しも怖くない……そんな気持でチューニング指示の為に立ち上った。2日と半日，船に揺られ，続いての夜汽車でたどりついた異国の地だから，もちろんいつもの調子とは違う。でも，もっと大きな原因がある様だ。後になって気がついたのだけれど……。

開演時間になってトコトコと舞台へ出る。椅子に腰掛けてふと客席を見る。あたり前のことだけれど，お客が皆外国人の顔をしている。東京でなら，見知りの顔が客席にチラリと見える。そうなると大変，どうしてもイイトコロを見せなくてはと，はりきりすぎて，ひどく，ひきつってしまうものである。ところが相手がロシア人ばかりだからそんな心配は全くない。かえって気が大きくなってしまった。「旅の恥は，かき捨て」というのがあるけど，知らない土地へ行くと，まま大胆不敵になる……どうもコレらしい。チューニングが終ると，美しいロシア婦人が舞台中央へ進み出て，「ではこれから日本からやって来た」とあいさつが始まる。もちろん，ロシア語だから，多分そんなことを言っているのだろうと想像しながら神妙に聴いているのだが……。やがて，プログラムの紹介があって，「……指揮，ヤスシ，アクタガワ……」となる訳である。

かくて演奏が始まり，終る。「ワーッ」と拍手が湧く。と，そのうち，その熱狂的な拍手が「パッ，パッ，パッ……」と誰からともなく手拍子に変わってくる。足並み揃えての行進みたいに，手拍子で演奏を賛えてくれるのである。私には，これが，何とも奇妙に感じられてならなかった。こんな拍手は，はじめてだ。でもそれと同時に，いかにも「ロシアで演奏してるんだなあ」と新たに感じたものである。



全員きもの姿でレセプションに出席した新響の女性軍。



モスクワで日本料理のレセプション。新響の男性軍も天ぷらを揚げるのに汗だくだった。

演奏会場は，伝統的な天井の高い長方形で，外国の音楽映画に出てくるコンサートホールを思い出す。客席には角ばった木の椅子が整然と並び，我々の座る舞台の椅子も脚の高い木製で，深く腰かけると足が宙ぶらりんになって，地につかない状態で演奏しなければならない人もいたとか……。管楽器奏者の為の山台もなく，彼らも我々弦楽器奏者と地位を同じうしての演奏であった。

モスクワなどでは街へ出ると，皆が楽譜屋に殺到し，ロシア語で書かれた楽譜の表紙をにらんで四苦八苦。値段が安いか高いか知らないけれども，半分，めずらしさも手伝って買いあさった。ロシアの作曲家の作品や，そうでなくても日本ではなかなか手に入らないものもあって，得難いチャンスではあった。あんなに大勢で押しかけたのだから，楽譜屋さんは「日本では，よほど楽譜を手に入れるのが難しいんでしょう……」などと思ったかもしれない。

私の考えでは，演奏の出来は総じて，マアマア良かったと思っている。ロシアでチャイコフスキーを演奏したのだから思い残すことはあるまい。我々のチャイコフスキーをむこうの人達が果して，どんな気持ちで聴いてくれたか，確かなことはわからないけれど，よく注意して，客席の反応を思い返してみると，何となく，ロシア人の音楽の好みが解ってくるようである。ゆっくりしたうんと甘いものに砂糖をかけて，これでもかと聴かせるようなのがいいらしい。これを，ロシア風とでも言おうか。

いろんな事があって，いろんな経験をした。でもとにかく，とても素晴らしい旅行だった。全部をここに書くことはとてもできない。市内見学みたいなことを書くのはやめにして，特に，おもしろいなと思ったことを少し書き並べてみた。

（新交響楽団　コンサートマスター）



レセプションのホストは我が芥川氏

イルクーツク・フィルハーモニーの練習を見学。
指揮者はバルソフ氏



ソヴィエト旅行裏話

芥　川　也寸志

◆　ハバロフスク

最初の演奏地なので，演奏会の始まる前は柄になく一寸緊張する。しかし私の見るところ，ソヴィエト側の緊張は輪をかけていた。われわれの招待主である〈全ソ青年団体委員会〉からは，プロコポフ・アジア部長と，その部下であるリーダさんという体格のいい女性が，ナホトカからずっと付き添ってくれたが，リーダ女史にいたっては，楽屋の中をあっちへウロウロ，こっちへウロウロ，落ち着かぬことおびただしい。彼女は，たしかに私以上にあがっていた。まあまあの成績で演奏が終り，誰もいない指揮者控室に戻るやいなや，真先に彼女が駆けこんできた。そして，ロシア語でなにやら叫んだかと思うと，やにわに私を抱いて，汗だらけのホッペタにチュウと音をたてて接吻したのである。

ロシアの女性に接吻されたのも始めてなら，ロシアの女性があんなに興奮したのを見たのも始めであった。

◆　イルクーツク

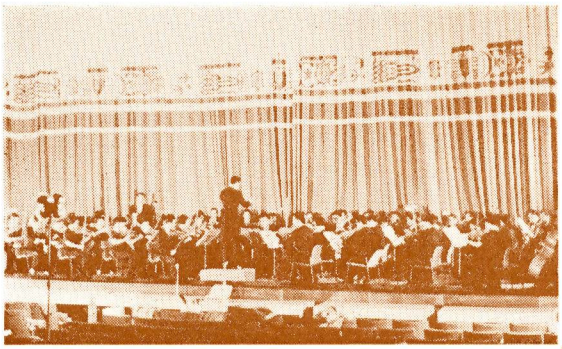
ここでは，イルクーツク・フィルの常任指揮者バルソフさんにいろいろと親切にして頂いた。彼はフィルハーモニー・ザールでの演奏会の間中，舞台の袖でずっと演奏を聞いていて下さった。うまくいくと右手の親指を上にあげて，〈いいぞ，いいぞ〉という激励をして下さったし，ヘマをやると，くるりと後をふり返って，さも聞いていなかったような素振りをして下さった。

演奏会が終ってから，ホテルでバルソフさんもまじえて，コムソモールの方々と祝盃をあげる段になって驚いた。テーブルの上に出されたブドウ酒のレッテルには，ARIGATE と書いてある。念のために，このブドウ酒の名前は？　ときいてみると，やっぱり〈アリガテエ〉だそうである。

〈有難てえ〉とはまさにこのことである。われわれは酔のまわるのも忘れて，このロシア産のブドウ酒に舌つづみをうった。

◆　モスクワ

モスクワでの2回目の演奏会は，モスクワ大学の大講堂で，ステージ正面にはでっかいレーニンの肖像がぶら



モスクワでテレビの録画，新響の演奏はソ連全土に放送された

演奏会が終ると，団員達もサイン攻めに会った



下っていた。

舞台稽古をしていたときは，さほど気にならなかったのに，本番が始まると，いやに気になり出した。舞台は横に長く，奥は比較的浅いので，でっかいレーニンに始めから終りまでにらまれ通しである。

それでも始めのうちは，よく禿はげたなあなどと思いながら棒を振る余裕があったのに，そのうちにだんだんおかしくなってきた。ヘラヘラと笑ったような気がしたりウィンクしたような気がしたり，やたらに気味がわるくなり出した。畜生この野郎めが，と思えば思うほどますますいけなくなる。そこで私はカラヤン流に眼をつぶることにした。ところが，そのとたん，わが新響の演奏は断然光彩をはなち出したのである。

モスクワの演奏会での私の印象は，〈やっぱりレーニンは偉いんだなあ〉である。

◆　レニングラード

演奏会がすんでから，楽屋を訪れてくれる人の数は，レニングラードが一番多かった。日本と同じように，プログラムにサインをしてくれというのがほとんど大部分。中には日本の事情をききたいという人や，私の作品についての説明を求める人もいた。その中の一人に，レニングラード・フィルの老楽員がいて，アンコールでやった〈ルスランとリュドミラ序曲〉をひどくほめてくれた。ブルーノー・ワルターやフルトヴェングラーの棒で彼がこの曲を弾いた時の話などは，滅多に聞けない貴重なものだった。演奏終了後にサインを求めるのは，日本と似た風景だが，彼等が日本のファンと大変違うところは，絵葉書とか小さな人形とか，ささやかながらお礼の品を必ず用意してくることだ。中には自分で編んだという花瓶敷を持参した老婦人もあった。こういう音楽愛好家の姿というものは，われわれ音楽家にとってどれほど大きな励ましになることだろう。楽屋を訪れてくれた彼等は，ことごとく〈演奏をきかせてくれて有難う〉と私にいった。4ルーブル以上の入場料を払って聞きに来てくれたのは彼等であり，〈有難う〉といわなければならないのは私の方だ。

帰りがけの駄賃にサインも——という風に見える日本の音楽ファンに，このへんのところを見習っていただけないものだろうか。たとえ，見かけは小さな行為ではあっても，それは必ず，日本の音楽を大きく育てることだろう。

（新交響楽団常任指揮者・訪ソ代表団団長）

「ソ　連　の　人　々」

平　松　竜　文

ソ連でびっくりしたことといえば，まず，その広大な国土である。モスクワから，9時間，飛行機に乗っても，まだ国内（ハバロフスク）なのである。国土の東西の長さにおいて，地球の4分の1以上を占めている。時差からみると，ソ連の東西両地点間では，11時間の差があり，これはロンドン，東京間の9時間よりもなお大きい。シベリヤ鉄道に乗って，モスクワへ行くとしたら，9日はかかるというのだから，いまさらながらその広大さに驚く。

次に驚いたことは，そこに住む人種の多様性である。国土が広大であれば，民族も多様であるのは当然であろう。80以上の民族からなるソ連は，世界に類のない多民族国家である。にも拘らず，人々は皮膚の色とか，人種の違いなどに全く無関心である。「ソビエト人」，「同志」という強固な共通の基盤の上において，人種，民族は問題ではなくなっている。これはソビエト体制のもたらした，ソ連人の一つの勝利として評価されうる。

彼らは外国人に対しても，非常に親切で，友好的である。一見，とっつきにくく見える彼らも，話し出せば，人なつっこい程近寄ってくる。勿論，そこには外国人に対する物めずらしさもあろうが，ロシヤ人のもつ大らかな民族性ともいうべきものを感じることがあった。ナホトカ－ハバロフスク間の列車のレストランで働くカーチャは30を過ぎたおばさんだった。そのレストランをやりくりするマネージャーだそうだが，でっぷり太った体格といい，誰に対しても変らぬその微笑といい，広大なロシヤにおける大陸的風ぼうに思えた。彼女はハバロフスクのアパートに住み，子供が2人ある。この列車は，観光客専用の夜行列車で，今はシーズン・オフのため，週1，2回だが，夏のシーズンには毎晩の如く走るそうである。

レニングラードで会ったルドルフさんは，ロシヤ的容ぼうというより，むしろ西欧人に近い感じであった。名前から察して，ドイツ人系であろう。レニングラードは西欧に近いこともあって，ゲルマン系やラテン系の顔がよく見られ，言葉もドイツ語を話す人が多い。彼もドイツ語を少々話す。まだ26，7のエンジニヤで，2人の子供がおり，夜は夜間大学に通っているとのことであった。当地での我々の世話をしていただき，話す機会も多かった。我々が去るに当り，見送りのレニングラードの駅では，終始一緒に歌を歌わせ，寒い夜のプラットホームのことで，こちらは少からず辟易の体であった。

ソ連で会った多くの人達の顔を思い出すとき，必ず手紙を出すと約束しておきながら，いまだその約束を果していない。早く，写真と手紙を送らねば，と思う昨今である。

（団　員）

次回演奏会予告

新交響楽団第16回定期演奏会

日　　時　1968年4月8日（月）　午後7時

会　　場　厚生年金会館大ホール

指　　揮　芥川也寸志

曲　　目　ブラームス：大学祝曲序曲

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲ホ短調

ベルリオーズ：幻想交響曲

パ ー ト か ら （その1）

ヴィオラの巻

楽器について

古くはヴィオラダガンバ，通称オヴィラという。

ビオラとひらたく発音するのが普通だが，ヴィオラというとしゃれて聞こえる。ヴァイオリンの母体となり，弦楽器でも最古のものでありながら，そのサイズは今もってきまっていない。ボディーの長さは39cmから43cmまで，そのタイプも様々である。僕のはストラッドのタイプ，ボディーも大きいがネックもまたやけにでかい。製作者の弁によると，ネックが一番むずかしくその腕前がわかるという。音量や音質もネックに起因するらしく，人間の鼻に相当する部分ともいえるようだ。ヴィオラはボディーが大きければそれだけで〝らしい〟音がする。小さい割りに〝らしい音〟を出す楽器は値段も高い。材料と腕が要求されるからだ。日本人は，身体が小さいから損をしている。

開放絃C・G・E・A，アルト記号で弾くヴィオラは，いわゆるしぶい音色を最大の武器としている。どの弦もそれぞれ特色のある音を有しているが，その中でも僕は，とりわけC線の第三ポジションの音が好きだ。やわらかく，幅広い音がする。ヴィオラでCとAの両方が良く鳴る楽器は少ない。たいていCが鳴ればAがかすれ，Aが響けばCがやせる。

4本の絃がともども〝らしい音〟を出す楽器は，製作者の確かな腕と材料，それに巧みな奏者の弾込みが必要である。一見，無格構な図体をしたヴィオラも，このように繊細な神経をもった楽器なのである。

このような楽器ヴィオラは，オーケストラの中で中音域を受けもっている。その役割は，常にオケ全体を意識して音をひろげることであって高音と低音部との橋渡しをすることであり，旋律を奏でるパートを巧に持ち上げることである。アンコといわれるゆえんだ。つつましやかに，良き女房役をつとめなければならない。新響のメンバーは気ままなのが多いから，ストレス解消に時々ぶっぱなすことがある。先生の身体が折れるように曲がって，右手で僕達を抑え，左手でヴァイオリンをあおってるのはこんなときだ。〝アンコのはみ出たぼた餅〟と叱られる。ヴァイオリンがオーバーに弾くとたぬきのおめめだとか〝イヤリングが多すぎる〟とか，わりときれいに叱られるのだ……が，ヴィオラはどうもさえない。しかし，中音域を支配するヴィオラは，音の中心に位置し，〝音楽のたのしさ〟に内面から触れることができる。さえない楽器ヴィオラ，僕達は永久に離れることはできない。

ソヴィエトの仲間

9月というのにイルクーツクはもう秋のおわり，街路樹がすっかり色づいていた。

着いた次の日，新響はハバロフスクに続いた，第2回目のステージをもった。会場には，イルクーツク市のオーケストラのメンバーがきていた。翌日，新響は逆に市のオーケストラの練習風景を見学した。そこには，昨日，休憩時間に僕達の前を行ったり来たりして，ついに言葉を交わさなかった連中がいた。市オケのヴィオラ族だ。

ヴィオラ奏者の内向的な性格はどこでも同じだと思った。環境も習慣も思想も異った場所，そこで数十年生活し，何かのきっかけでヴィオラを手がけた連中，その人間の性格がやはり僕達と似ていたということ。僕達は急に親しみを感じて，互いに弾き合い，ステージの上で写真を撮りあった。

別れ際にやわらかくなったチョコレートをくれたヴィオラのおばさん，今日は何をしているだろう。

（海江田　勉）

団員を募集しています

新交響楽団では広く団員を募集しています。楽器は何でも結構ですが特に弦楽器の方を歓迎します。どなたでも簡単なテストを受けて団員になることができます。練習は原則として毎週土曜日6時から9時まで東京文化会館のリハーサル室で行います。入団ご希望の方は直接練習会場へお越し下さるか，下記へお問合せ下さい。

千代田区麹町2―3　麹町ガーデンビル内
新交響楽協会　　TEL（262）4038

ビュッフェ　セザンヌ　モネ　梅原龍三郎

高畠達四郎　林　武　中川一政　ピサロ

小絲源太郎

巨匠たちをひとりじめ

ルソー

東郷青児　コロー

ルノワール　荻須高徳

ミレー　ローランサン

シスレー　田崎広助

宮本三郎　藤田嗣治

野口弥太郎　岡鹿之助



古今の名作であなたの素適なお部屋を飾ってみませんか？巨匠たちの生のマチエールをそのまま再現。原画同様の迫力で、あなたを魅了します。図書月販のレリーフ巧芸は独特の方法でこの複製に成功、今全国で話題になっています。お申し込みと同時に額つきの名作をお届けします。しかもお支払は毎月 1,000円ていどの分割払い。お家で相談して今すぐお申し込みください。

★お申し込みお問合せは下記へどうぞ

株式会社 図書月販

美術信販事業部

港区芝西久保巴町18 第2松田ビル(434)4667～8